

言はたせし

よかつたのに

日記

中公文庫

沢七郎

言わなければよかったのに日記

中公文庫

©1987

昭和六十二年十月二十五日印刷
昭和六十二年十一月十日発行

著者 深沢七郎

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷

カバー トープロ

用紙 本州製紙

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

ISBN4-12-201466-2

定価 四〇〇円

中公文庫

言わなければよかったのに日記

郎著



中央公論社

目次

1

言わなければよかったのに日記

とてもじゃないけど日記

銘木さがし

変な人だと言われちゃった日記

ないしょ話

133 109 96 54 11

2

柞葉^{ははぞば}の母

思い出多き女おッ母さん

思い出多き女おきん

こわい話

母校訪問

ささやき記

3

日本風ポルカ

193

シナ風ポルカ

197

江戸風ポルカ

201

落語風ポルカ

206

講談風ポルカ

210

シナ風ポルカ

212

181

178

174

164

154

143

江戸風ポルカ 216 廓風ポルカ 221 ポルカ・アカデミカ 225

歌舞伎風ポルカ 234 編曲風ポルカ 238 浪曲風ポルカ 244

ポルカ・パントマイム 248 ポルカ・クラシカ 251

自叙風ポルカ 256

あとがき

261

深沢七郎の透明日記

尾辻克彦

263

口絵写真 撮影・田山一郎

言わなければよかったのに日記

1

言わなければよかったのに日記

ボクは文壇事情を知らないから時々失敗してしまうのだ。

「知らないって、アナタは常識程度のことさえ知らないからダメだよ」

と、よくヒトに云われる程知らないのだ。（早く一人前にならなければ）と思って、一人前になるまでは、あまりモノを云わないことにしているが、相手が親切に話をしてくれると、後で冷汗をかくような失敗をしてしまって、そのたびに云わなければよかったのにと後悔するのだ。

◇去年の夏、正宗白鳥先生の軽井沢のお宅へ遊びに行った時だった。泊めていただいて、朝、ゴハンを食べる前に山道を散歩した。めし前の散歩と云っても二里も歩くのでびっくりした。正宗先生は足が達者で一緒に歩いていても私は時々、小跳びになって追いつ

かなければならない程速く歩くのだ。歩きながら話をして下さるのだが、明治、大正、昭和の文壇の様子を、その道の人でなければ知らない裏話などまで話して下さるのだ。ボクなどにはまったく未知の世界の話なので興味深かった。だが、その当時の編集者の名前とか、批評家、作家の名前を知らないのでまごついてしまった。

「そのヒトはどういう人ですか、作家ですか？ 編集者ですか？」

と、時々質問するのだが、お話の範囲が広く、画家とか新聞関係者の名も出てくるので質問するにも忙しかった。時々（あんまり、イチイチ聞いては失礼だ）と気がついて、知ってるような顔をして聞いていることもある。が、なんとなく、事情がわかるだけでも参考になるようなお話なのだ。一度質問した人の名を、（さっき、きいた人のことかもしれないけど、どういう人だったっけ？）と、記憶力が悪いボクはボーッとなっているうちに話はどんどん進んでしまう。それに、外国の作家の名と作品の名との違いもわからないときがあるのだ。だから、心細くなってしまって、そのたびに（ボクは作家になどなれる資格がないのだ）と思うのだ。もし作家になるなら大変な暗記力がなければダメだと、つくづく思うのだ。これは、（ひょっとしたら、作家になれるかも知れない）などという、甘い、虫のいい野望を起すようになったら大変だからよい教訓だ。作家になどなれないと昔からきめていたし、ボクは絵が下手なので自分の好きな情景を書きた

いだけなのだ。「笛吹川」で小説はおしまいにしようと思ったのは、書いても発表などしないで、仕舞っておいて、ときどき出して読んで、見せたいようなものが出来たら親しい人達にでも読んで貰おうというぐらいが楽しいことだと思ったからだ。作家になると、何か、責任を負わされるようで怖ろしいことだ。

◇正宗先生にはいつも失敗ばかりだ。まずいことばかり云ってしまつて失礼なことばかりだ。だいたい、一番はじめに先生の千束のお宅へ行った時、お庭に池があるとばかり思つて行つたのだが、池などないのである。(変だな?)と思ひながらドアの前に立つた。お庭は広く、山の中にあるような高い木があるけど池がないのは意外だった。(この先生と白鳥では、どんな関係があるのだろうか?)と不思議に思つた。ボクはバレーの「白鳥の湖」か「瀕死の白鳥」に關係のある人か、白鳥の好きな人だとばかり思つていたのに。椅子に腰かけて話をして下さるのを聞いているうちに気がついたのは、銘酒で有名な菊正宗の本家の跡取り息子にでも生れた人ではないかと思つた。そんなふうな、大家の家柄の生れた人だと気がついた。そう思えば先生の生れた家には白鳥が住んでいるような池があるような気がしてきた。念のために、

「先生は酒の……、菊正宗の……?」

と伺うと、

「ボクはそんな家とは何の関係もないよ」

とおっしゃった。今、考えても、まずいことを云っちゃって、と悔んでいる。

◇正宗先生と銀座を歩いている時だ。人ゴミの中を歩いても先生は目が速い。

「いま、あそこへ行ったのがツボイサカエだ」

と教えてくれた。ふり返ったが、どの人だかわからなかった。

「ツボイサカエというのは男ですか？ 女ですか？」

ときくと、

「女だ」

と云うのである。（うちにはサカエという甥がいるけど）と思っていると、

「君はナンニモ知らんな、知らんからいいかもしれんな」

と、うまいことを云って下さったので、ついでに、

「いくつぐらいの人ですか？」

ときいた。

「いくつぐらいになるかなあ」

と考えてるらしいので、

「『二十四の瞳』を書いた人でしょう、まだ子供でしょう」

と云うと、

「いや、四、五十位になるだろう」

と云うのである。（ボクのカンでは、ものを云うことも出来ない）と思った。家へ帰って、

「ツボイサカエというのは女だぞ」

と云うと、弟が、

「そんなことを聞いてしまったのか」

と驚くので、

「知らなかったから聞いたのだ、誰だって、はじめから知ってる奴があるものか、そんなことを云うなら、てめえ知っていたのか」

と文句を云うと、

「そんなことは聞かないでも、黙っていれば自然にわかることだ」

と云うのである。

「自然に？」